

**警告する人と受ける人への警告の性質**

3月から、私たちの行動について通常ではない規制がたくさん決められました。法律化され、罰金も設けられました。時に、このような規制は個人の自由を侵害しているようにみえます。論理的でないようにもみえます。また政府が決めた規制を変更したこともありました。世界中で、指導者が警告を誤ったり、偽善的になったり、法律が独断的になったりする危険があります。民衆はさらに不満が募り、権力に対して抵抗したり、反対したりし始めています。

しかし、警告が完全に信頼できるものであるならば、従わないのは自らを危険にさらすこととなります。例えば、車に乗った時に、ガソリンの残量が少なくなっているのを知らせるランプが点灯し、「無くなる前に給油してください。そうしなければどこかで立ち往生することになります。」という警告が与えられたとします。私が分別のある人間ならば、その忠告に注意を払い、エンジンが止まって業者を呼び出さなければならなくなる前に、給油するでしょう。

また、我が子に注意をする親の例えを考えてみましょう。悲しいことに、親が何かについて我が子に注意をしても、子供はその忠告を無視するのが一般的な反応になっています。確かに、注意や脅威の多くは、「空虚」なものです。本当の忠告や脅威ではありません。子供たちがそのような忠告や脅威を無視する理由の一つは、自分の好き勝手に行動しても、悪い結果があるわけではないのを知っているからです。

しかし、「道路に飛び出したら、怪我をするか、それよりも悪いことが起こる」というような、ある災難の脅威が現実的で、警告が妥当であるなら、その警告を無視する子供は、少なくとも愚かです。しかし、その子供が賢明であり、運転者が用心深い人なら、確かな警告を与えられた時、彼らはそれを聞き、注意して、賢く行動するでしょう。

**警告**

与える人が信用するに値し、受ける人が謙遜である場合 = 賢明

与える人が信用するに値し、受ける人が高慢である場合 = 大参事

ヘブル人への手紙の著者による、この警告は、聖書の中で最も厳しいものの一つです。この手紙の中では確実に最も厳しいものです。この警告は100%信頼でき、そして、へりくだった心を持つ人に、聞く耳を持つように、そして自分には関係のない空っぽで仮定の警告だと思いこまないように呼びかけています。この警告は霊的背教の恐ろしい危険についてです。背教という言葉は、捨て去ること、遺棄を意味します。立場を変えること、それは鈍く聞き方がもたらす危険です。

**成長を妨げる霊的幼稚性、霊的成熟へ続く小道(5:11-6:3)**

著者は、彼らの霊的成長を妨げたものについて警告した後、再び成長するために信仰の基礎に戻りなさいと言っています。そして、信仰のいろはに留まってしまっている霊的怠惰を悔い改め、基礎となる真理から成熟へと進むことにより、主が望まれるなら、彼らが知恵のうちに成長するように強く勧めています。

**警告とそれを受ける人の本性(6:4a & 6a)**

(以前は教会にいたのに) 6節「墮落してしまうなら、そういう人達をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。」

以前は普遍的教会にいたけれども、離脱した人をもう一度信仰に立ち返らせることは不可能だ—これは厳しい警告です。このカテゴリーに当てはまる人々がどのような人なのかを見て行きますが、まず次の三つの見方に注目しましょう。

1. 心から信じた本物のクリスチャンが墮落し、救いを失う—つまり、救いは失うことがあるし、取り戻せるものだと教える人々に対して、著者は違うと言います。本当に救われた人が、はたして救いを失うことができるのでしょうか。ヨハネ 10:28-29 には、彼らに与えられた永遠のいのちを、だれも奪い去ることはできないとあります。聖書は矛盾していません。
2. この箇所の説明は、もしこのような警告を本物のクリスチャンが受けたらという仮定の話で、決して現実を起こることはありません。これは、現実的な警告ではありません。
3. この箇所の説明は、福音に影響を受けた個人のことで、その人はクリスチャンにみえるけれど、実はクリスチャンではありません。イスカリオテのユダの例にあるように、クリスチャンの中心にしながら、信仰の家族には加わらないことは可能なのです。これは作り事の警告ではありません。ここで説明されている、信仰の家族から離れて行った人々というのは、はじめからそこに属していなかったのです。新約聖書は、自らクリスチャンと告白している人々の中に、最後まで貫き通さない人もいることを警告しています。聖書はそのことを警告し、体験から、確かにそうだとわかります。ジョン・マッカサー師が、「それは、居心地がいいと感じている人を恐れさせ、恐れている人に慰めを与える。」と言っている通りです。

霊的な幼さは危険を招くので、この短くも強く心をとらえる警告に注目しなければなりません。

## 一度光に照らされた(4b)

### 4 節前半「一度光に照らされ…」

「光に照らされ」と訳された言葉は、光の粒子である「光子」の語源ともなっている言葉に関係しています。

**コロサイ 1:13 「御父は、私たちが暗闇の力から救い出して…くださいました。」**

未信者は皆、霊的には闇の中っていると聖書は言っています。しかし、離れてしまった人々は、ある意味で、光を経験した時がありました。現代風に言えば「電気が灯る」ということでしょうか。彼らも、一度はイエス様の福音の真理を見たのです。

## 天からの賜物をあじわい、神のすばらしいみことばと力を味わった (4c, 5)

**「<sup>4</sup>…天からの賜物を味わい…<sup>5</sup>神のすばらしいみことばと、来たるべき世の力を味わったうえで」**

著者がこの手紙を書いた時点では、墮落し信仰から離れてしまっていた人々も、かつて「味わい」ました。何か美味しいものを味わうとき、それを楽しみますが、それが栄養となるかは全く別の話です。離れて行く人かどうかを見極める際に最初に覚えておくべきことは、「味わう」ことの本質を考えることです。それは、飲み込み、消化し、栄養を吸収するという過程のほんの始まりの部分に過ぎません。ある期間、何度も

味わったのではないかという人がいるかもしれませんが、最終的には、彼らは霊的食物を飲み込む前に吐き出したのです。

彼らは何を味わったのでしょうか。まず、「天からの賜物」です。そして、それは5節にあるように「神のすばらしいみことば」と通してでした。神様のみことばは、後に来る、よみがえりの力の祝福を約束しています。

これは、天から来られたイエス様を主、救い主と信じることにより、神様と正しい関係を持つという賜物です。イエス様の生涯、死、よみがえり、昇天により、イエス様は私たちに永遠に続く賜物を残してくださいました。それは、今始まり、永遠に続く赦しと栄光です。

彼らはそれを味わっただけでした。それを飲み込み、成長し、一つとなったヘブル人のクリスチャンを納得させるほど、彼らも一時は、その賜物を楽しんだかもしれません。しかし、彼らは味見したに過ぎず、4節後半にあるように、天からの賜物の一部として聖霊にあずかりました。

### 聖霊にあずかる (4節後半)

彼らは聖霊にあずかる者となったのです。聖霊にあずかりながら、本物の信者でないことは可能かという疑問が当然沸いてきます。この箇所が意味していることは、パウロがエペソ 1:13 で「信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押される」と言っていることとは違います。味わうのが消化するのと全く違うように、聖霊にあずかることは、聖霊によって証印を押されるのとは全く違うのです。

マタイ 7:21-23 のイエス様のことばを思い出しましょう。

<sup>21</sup> わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。<sup>22</sup> その日には多くの者がわたしに言うでしょう、『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行なったではありませんか。』<sup>23</sup> しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行なう者たち、わたしから離れて行け。』」

言い換えれば、ここで主が言われたように、聖霊様の働きのある種の現れがあるように見えるけれども、聖霊様によって証印を押されていない人がいるということです。聖霊様が、その人の内に住まわってはおられないのです。

現代で考えてみれば、教会に来ているし、霊的真理によって心が動かされて、涙まで流すけれども、本当にイエス様に従う人ではない場合があるということです。

1700年代に北アメリカで起こった大きなリバイバルが、その悲惨な証拠です。聖霊様を味わう体験はあったようですが、すぐに多くの人が墮落し、背教者となりました。これこそが、アメリカの偉大な神学者ジョナサン・エドワーズが「宗教感情論(原題 *The Religious Affections*)」を書いた理由です。エドワーズは、内なる変化が様々な形で現れて本物の信者のように見えた人々の中に、信仰を最後まで貫き通さなかった人たちがいたという現実と戦いました。

旧約聖書にもサウロ王という例があります。一時は、神様のご栄光のために、御霊により力を受け、預言者ともされたのですが、最後には、それとは程遠く、不信仰と神様の裁きのもとに死にました。

ヘブル人への手紙の著者が記したのは、真の信者の本性ではありません。それは、一時だけ本物のように見える未信者の本性です。本人も自分が本物の信者だと思い込んでいるかもしれませんが、それは、その人が天からの賜物を味わい、聖霊様にあずかっている一時だけのことです。

この手紙が書かれた時に起きていた悲く残念な状況は、そのような人々が、霊的真理を吐き出し、御霊の領域から離れ、古い昔の宗教に戻ってしまっていたことです。

### 墮落したものを悔い改めに立ち返らせることは不可能 (6 節前半)

**6 節 「墮落してしまうなら、そういう人たちをもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。」**

背教へと墮落し、離れてしまった人を、悔い改めに立ち返らせ、神様と正しい関係に戻すことは不可能です。ここで、この手紙の背景を思い出しましょう。ヘブル人は、ユダヤ人のクリスチャンの教会です。そして、教会外のユダヤ人が新しい信者に、モーセと律法に戻るように圧力をかけていました。そのため、味わっただけの人々が、神様に立ち返る方法として、いけにえのシステムに戻っていたのです。イエス様が来られた今、イエス・キリストを待ちわびていたシステム全体(旧約)は、もはや影響力を持ちません。教会外のユダヤ人たちは、悔い改めの賜物と神様との正しい関係は神殿にあると主張していました。しかし、この手紙の著者は、それはありえないと言っています。罪の赦しは、完全ないけにえとなられた、完全な祭司なるお方の内にあるからです。引き返すことは、目的地から、道の途中にたてられた神様の標識に戻って行くようなものです。標識は目的地であるキリストの代わりにはなれません。著者は、さらに立ち返らせることが不可能な決定的な理由を記しています。

### なぜ不可能なのか。 (6 節後半—8 節)

**6 節後半 「彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、さらしものにする者たちだからです。」**

この手紙が書かれた正確な年代はわかりませんが、紀元 70 年のエルサレム神殿の崩壊よりも前です。この箇所を理解するために、カヤパと義父のアンナスを思い出してください。イエス様の亡くなられた時、大祭司だった人々です。カヤパの後、アンナスの子孫五代が、紀元 30 年のイエス様の死から、紀元 70 年エルサレム陥落まで 40 年以上も大祭司を務めました。最後から二人目の大祭司は、イエス様の弟ヤコブの石打を命じた人物です。このヤコブは、新約聖書のヤコブの手紙の著者です。

イエス様に関する素晴らしい真理を一度は味わった人が、ユダヤ人クリスチャンの群れを離れた時、彼らはイエス様を十字架につけた墮落そのものの側に移っていました。彼らは、彼らを救うことのできる唯一のお方を殺した邪悪な指導者と共に、霊的背教に加わっていたのです。そして、イエス様を侮辱するだけでなく、彼ら自身をも傷つけていました。次の節にある比喻でわかるように、究極の裁きが訪れます。

**「たびたび降り注ぐ雨を吸い込んで、耕す人たちに、有用な作物を生じる土地は、神の祝福にあずかりませんが、<sup>8</sup> 茅やあざみを生えさせる土地は無用で、やがてのろわれ、最後は焼かれてしまうのです。」**

マルコ 4 章でイエス様が語られた種蒔きのたとえ話を思い出させます。イエス様の福音の種を受け取り、信仰の内に成長する心に対して、聞く(味わう)けれども、この世の思い煩いや富の惑わしが入り込む心は、神様にある成長を締め出し、墮落してしまいます。

**1 ヨハネ 2:19 「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。…」**

脱離の結果は、イエス様を十字架につけた人々との同調です。彼らは、悔い改めと救いの唯一の方法を拒否し、世俗の茨やあざみを生えさせていたのです。

### **ガラテヤ 6:7 「神は侮られるような方ではありません。」**

離れて行った人々が反抗の姿勢を変えず、拒否するところにとどまっている限り、彼らを取り戻すことは不可能です。

しかし、私たちは神様が憐れみ深いことも知っています。

放蕩息子のように我に返って悔い改めるなら、「救うことは不可能だ」とは言いません。著者はそう言っているではありません。永遠の裁きにあうのは、いつまでも悔い改めない人です。キリストに立ち返るならば、必ず神様の憐れみを受けることができます。

神様は決して侮られるような方ではありません。キリストから顔を背ける人は、他の誰からも何からも救いを得ることはできません。それはあり得ないからです。離れて行ったヘブル人にとって不可能であったのと同じです。

ですから、一度はキリストを告白したのに離れてしまったあなたの息子、娘、孫、姉妹、兄弟、友人のことで希望を失わないでください。この聖書箇所は、あなたの祈りが無駄だと言っているのではないのです。神様は憐れみ深く、力あるお方です。神様の時に、信じて祈ったあなたの祈りに対し、きっとあなたの望む通りに応えてくださるでしょう。彼らが、かつて楽しんだ味わいから歩を進めて、罪を認め、悔い改め、信じて、救いを受け取るように、御霊が働いてくださるように祈り続けましょう。

警告は厳しいですが、そこには希望があります。

### **警告の中に与えられた希望 (9-12 節)**

*<sup>9</sup>だが、愛する者たち。私たちはこのように言っていますが、あなたがたについては、もっと良いこと、救いにつながることを確信しています。<sup>10</sup>神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてくださいなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」*

ここで著者は、警告から、救いの確信を伴う励ましへと移っています。神様は、彼らのこれまでの働きや、聖徒たちへの愛をご覧になりました。聖徒とは、聖い人々、神様が取り分けられた人々、つまり、仲間のクリスチャンのことです。

良い行ないで神様の好意を得ることができるということではありません。

**ヘブル 11:6 「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」**

神様は恵み深いお方ですが、働きは、信仰の後です。イザヤ 64:6 にあるように、神様から見れば、信仰に入る前の働きは全て、不潔な衣のようです。救いにつながる唯一の働きは、イエス様の御業です。ですから、本物の信者に示される愛の行いは、その人が救いを受け取ったことによるしるしです。愛の行いは、救いを証拠であって、救いの手段ではありません。

*<sup>11</sup> 私たちが切望するのは、あなたがた一人ひとりが同じ熱心さを示して、最後まで私たちの希望について十分な確信を持ち続け、<sup>12</sup> その結果、怠け者とならずに、信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となることです。」*

著者は、互いへの愛と同じくらい、彼らが未来の希望に確信を持つようになることを望んでいます。彼らの信仰が「鈍くなる」ことのないようにです。(先週見たヘブル 5:11 と同じ言葉)

信仰が栄光の約束を受け継ぐようになるまで持ちこたえる、成熟した信仰を持つ人々に倣わなければなりませんでした。

ジョン・ストット師は「背教の核心は、十字架にかけられたお方の側から、十字架にかけた人の側へ立場を変えることだ」と言っています。

### しっかりと受け取られた警告

聞く耳を持たず、時間が経って、ついにはキリストに対して心が冷めてしまったということになりませんように。それは、キリストを再び十字架にかけるのと同じ状態です。墮落に対するこの最も厳しい警告を真剣に受け止めるならば、神様がそれを許されないのを、私たちは知っています。

「本物のクリスチャンは、最後まで貫き通す。そうしなければならないからだ。」